家族総ぐるみの団結駅伝。中には夫―妻―子と、文字通り総出で走った家庭もある。（写真は五区―六区でバトンタッチする執行部チーム）

決意こめ団結駅伝終る

53才の選手走り抜く

よし、いよいよ春闘だ

去る二十七日、三池労組は華々しい成功の裏に、〝第三回団結駅伝大会〟を終わった。

敢闘成績は別表の通りで、かなりの番狂わせが、その日組合本部前道路を埋めた組合員や家族を湧き立たせた。

栄冠は、宮浦一～二分会チームへ。三川三分会（今年五位）の三連覇はならなかった。

この日は、思いがけないことに阿具根登参議が、顔をほころばせながら応援にかけつけ、閉会式で次のはげましを贈りみんなをよろこばせた――

「いよいよ春闘ですが、今年は敵の側の構えも違ってきています。こっちもよほどの団結が必要ですが、その一つが今日の喇れの駅伝かと思います。今日を起点にいよいよ春闘に向け、団結を固めてください」

最後に古賀組合長の音頭で叫ぶ「団結、がんばろう」にも、思わず力がはいったが、今年の駅伝でも幾つかのエピソードが生まれている。

宮浦六分会（電気）は総勢二十一人。それで断固として一つのチームを編成して敢闘。人手が足りず、着物もち手も二区間の選手のものを受けもったりの苦心だったと。

同じく宮浦三分会で、選手となって走り抜いた谷口光典さん（坑内運搬工）は、過去に胃潰瘍で四回も手術。一時は再起不能を心配された体だったが、自からチームづくりに奔走。奔走した以上は、自分も……で走ったのだった。年令も五十才。

所要時間をズバリ当てた、北村さん

今年の団結駅伝で優勝の栄冠を手にしたのは、別項にあるように宮浦指導部一・二分会混成チームだったが、その優勝チームの走破所要時間予想投票で、そのものズバリ――五十五分〇三秒を予想した北村存さん（宮浦指導部）がもちろん一位、ついで五十五分と、近い予想をたてた宇戸口春男さん（三川指導部）が二位となり、それぞれ思わぬ受賞はよろこんでいた。

あとの打上げの席で、一盃を置きながら、よほどうれしかったか、谷口さんはそっと涙をふいていたとか。

かわって三川二分会（仕繰）も職場自体が年寄りばかり。なかでも、選手の一人として走った内野義次さんは、停年前の五十三才。

打ち上げの席で、同分会では早くも来年のチーム編成ができたというが、内野さんは、「来年こそ最後の駅伝だ。俺も走る」と、早くも決意しているとと。

やっぱり三池の団結駅伝だ。

団結駅伝敢闘順位

順位	チーム名	所要時間
		分　秒
1	宮浦1・2分会	55.03
2	四山団結チーム	55.10
3	宮浦6分会	55.15
4	〃 7・8分会	55.20
5	三川3分会	55.36
6	宮浦3・4・5・9分会	57.17
7	四山統一チーム	57.25
8	三川9分会	57.40
9	四山抵抗チーム	57.45
10	三川7・8分会	58.29
11	〃 1分会	58.56
12	〃 坑外分会	59.54
13	〃 2分会	60.17
14	執行部	60.44
15	港務所全	60.57
16	本所全	62.20

三池で、全労働者が手を取り合おう

主張

日本国中の耳目をそばだたせた〝あさま山荘〟の事件は、人間の生命の大切さをわれわれに教えている。一人の人間の生命を守るために、いかに多くの人間が苦労し、中でも救出に向った警官が二人も死亡した事実の前に、人間の生命を虫ケラとも思わぬ独占資本、わけても三井資本は恥かしくもなく今もって人殺しを続けている。

業務上死亡で、この二警官にはそれぞれ弔慰金二千二百万円が贈られる。もちろん、人間の生命は決して金銭勘定にはかえられないが、それは炭鉱における災害弔慰金の五倍強に当たる。石炭資本がいかに人を人と思わぬものか、この一事を見ても明らかである。

しわよせは抵抗なきところに

合理化は、抵抗のないところにしわよせされてくる。これは、必然の理である。三池における歴史が、そのことを証明する。

三川鉱大爆発は、三池の全労働者の抵抗力を組織分断によって弱め、それを足場としてすすめられた合理化の結果であった。最近の三池における死亡災害を見ても、三池労組員の犠牲者は、四山の小石同志を昭和四十三年に三井によって奪われて以来、一人もない。それにひきかえ新労組員は、四十三年以降二十名。職員六名。組関係また六名となっている。文字通り、合理化の毒牙は抵抗のないところに襲いかかっているのだ。

さらに注目すべきことは、差別と組織切り崩しに、会社と一体になって狂奔した職組員に多くの犠牲者が生まれていることで、これ以上皮肉なこともない。職組員の坑内員は、六百名足らずである。とすれば、一番の〝しわよせ〟を背負っているのは職員ということになる。かけがえのない身体ごと投げ出して、会社の合理化に協力している事実を示しているとさえいえる。

三井建設下の組夫もまたモロに合理化の犠牲をかぶっている。無権利で、より差別待遇の中で働かされていることを思えば、哀れである。もともと、働く者の側には何の差別も必要ではないのだが。

しあわせは全労働者と共に

このように、抵抗のない労働者に、より合理化の重荷がのしかかることは、長い闘いの歴史が教えている。

死亡災害の具体的な数字で証明ずみであるが、新労組員、組夫、職員――といえども、同じ働く仲間である。その働く仲間が、現実に冷酷な三井の合理化によって殺されている以上、今こそ死亡災害が出ていないとはいえ、三池労組員としても、やはり同一の体制内におかれているのであって、われわれの生命が基本的に保証されるには、三池炭鉱のすべての現場でだれであれ一人も死亡させないという態勢を確立させなければならない。まさに新労組員や組夫の人が殺されるのに抗議ストを打つのではなく、三池の労働者すべての生命と家族の生活を守るためのものだとの認識が何よりも大切である。

三千人・二万トン体制の合理化は、今後も殺人的に強行され、数多くの犠牲者をつくり出さずにはおかない。

三井資本は職組と新労組幹部を総動員して、三池労組の抗議ストの無効果になる宣伝を行うに違いない。われわれは、平和協定の矛盾をあばく体制を、事実にもとずき職場の中でつくり上げ、職場のあらゆる闘いに、三池の全労働者共通の要求を取り上げ、全体の力を結集する体制づくりを急がなければならない。

「一人は万人のために、万人は一人のために！」の合言葉を腹に据え、生命と健康と生活を守る闘いを強めよう。まして石炭産業の現状は、やまはビルドでも、働く者はいつ、だれがスクラップされるか、予測できないことを示していることでもあるから。

何が問われているか

まなぶ集会、おどろく真剣さ

第九回「三池にまなぶ会」全国集会が、今年も二月の十九日から三日間の日程で行なわれた。不況を口実に労働者への一方的合理化によって切りぬけようとする独占資本に対し労働者の学習誌「まなぶ」を手に職場地域で生活と権利を守る闘いそして学ぶ青年労働者が、北は北海道から南は鹿児島まで、希望者の中から選び抜かれた三百四十九人が参加した。

今回の参加者の特徴は、日ごろから学習会を組織しながら、長期抵抗、大衆路線を意識的に追及している労働者たちの、まったく自主的な参加にあった。

その間三池の労働者、主婦会との短い時間の中での交流会が持たれたが、多くの問題点を出し合っての話し合いと、それを通して結ばれる連帯が勝ちとられたことは確かである。

まなぶ会の事務局の計画には、十九日の夕食は労働会館でとることになっていたが「寒い中での夕食は大変だ」、という主婦の声によって、地域分会へ分散して夕食をとるなど、三池ならでは……の話題も生まれた。

交流会では、三池を学ぶためにやってきた人たちのひとことひとことが胸をさした。

「貴方は、労働強化や低賃金で差別をされながら、なぜ三池炭鉱労働者として頑張っているのですか」

「家族ぐるみの闘いとして、子供たちとの対話はどのような方向でなされているのですか」

「何かやろうとする時、集会に集まりにくいという現状をどのように克服しようとしているのですか」……などなど。

また、三池からは「三池三池というが、何を学びにきているのか」――の問いがでるなど、お互いに問題意識を持っての交流にしようと、懸命な話し合いは深夜まで続いた。

学ぶという姿勢の重要性と、体制的といわれる合理化攻撃に対し十分な討議と闘いへの具体的な方向の把握が問われているのを、つくづく示していた。事実、総括会議で向坂先生から、「三池の労働者は、独占資本には闘うが子供を育る方向が不十分である」、と指摘されている。三池の労働者がはたさねばならぬ任務はますます重大なものになっている。

なお、まなぶ会の仲間からよせられたカンパ金十五万一千七円。よせ書など六十八枚。CO守る会への加入者は、実に二百十六名にも達した。

あきれた話

▼…三池労組では、これからは三池新労組や組夫が、災害のため死亡しても、ストライキをうって抗議する決意固めが広がっているが、三池新労組の山下組合長はこのことについて、次のように語っている。

「抗議ストは賃金カットなど、組合員の犠牲が大きい。団交で会社側と話し合い、具体的保安対策を申入れるがよい。それに、新労組員の死亡事故が多いのは、三池労組より組合員の数が多いからだ」

（朝日新聞三月一日朝刊の記事から）